

五期会を通してみる、1950-70年代の設計組織の変遷について

A STUDY ON THE TRANSITION ABOUT THE NOTION OF DESIGN ORGANIZATIONS IN THE 50S-70S, THROUGH THE RESEARCH ON GOKIKAI

建築デザイン分野 細川大貴

1950-70年代の設計組織の変遷を明らかにし、建築家の存在が問われた戦後の様相を考察する。その足がかりとして、建築運動「五期会」が抱いた設計組織思想を考察し、自立か組織に所属かという建築家将来像の違いと、設計者の個性の認識がこれに影響することがわかった。そこから考察すると、組織内の、1.個々の個性 2.グループの個性 3.少数の個性を作品に反映しようとした設計組織が、この時期に誕生したことがわかった。また2と3は現在の建築界につながる系譜であるともいえる。This study is written with the aim of clarifying the Architectural history after WW2, tracing the design organizations in the 50s-70s. To get the hints about this research, we discussed the design organizations idea, which was hold on "GOKIKAI". We found that the difference of the future image in architects and the character of designers in his work influence the design organizations idea. We traced the design organizations in the 50s-70s through these hints; we found these 3 groups arising in this era. No.1;Characters of each of person were reflected. No.2;Character as group was reflected. No.3; Characters of some person were reflected. Additionally, we consider No.2 and No.3 groups as a historical lineage of current situation.

1. はじめに

1-1. 研究の背景

戦後、1950年代に入ると建築生産は活発化し、それに伴って設計行為は複雑化して、「ある個人の能力を越えようとする時代」¹⁾に入る。設計行為は、大量化、大規模化、高度化して工期の短縮が要請され、専門化、分業化の必要性が徐々に生じていた。²⁾そうして戦前までにはなかった、組織で設計を行う体制が模索され、そのための設計方法が求められるようになった。それと同時に、設計活動における個人と組織の関係、設計と施工の関係に意識が向けられるようになり、新しい時代の建築家のあり方、建築家の職能も問われはじめてきた。このように戦後の時代というのは、建築家の存在自体の再定義が行われようとした点で、戦前と大きな違いがある。

しかしその様相は、一般に戦後建築史において認識しがたいとされている。特に建築家個人の作家研究や、建築作品の研究では、この点が捉えられない。そういう時に、当時の設計組織に関する議論や運動、設計組織の活動に目を向ける必要がある。

ここで、同時期に活動した建築運動である「五期会」に注目したい。1956年から1960年までの間、設計体制の変革を通して、建築運動で初めて内的な建築家の職能の問題に意識を向けた運動であるとい

われている。³⁾

だが「五期会」は先進的な目的意識を掲げる反面、体制の不備から5年間の短期間で解消し、明確な成果が残せていない。ゆえに戦後建築史においては、一建築運動としての認識程度で、今日その意義を語られることは少ない。しかし、建築家の存在の再定義にまつわる歴史をみていくとき、これは重要な要素のひとつとなり得るだろう。この視点は今まで捉えられてきたといえ、明らかにする必要がある。

また上述した、見えづらい当時の設計組織に関する意識や、アトリエと組織の関係を解き明かす際に、実は五期会は時代的に重要な位置にあるといえる。さらに会の活動以後においては、「五期会」で活動していたメンバーが、その後の建築史において主要な役割を果たす。

以上のような検討点をもつ「五期会」の考察により、メンバーが抱いた設計組織思想を明らかにすることは、当時の設計組織の様相を紐解く手がかりとなるであろう。

1-2. 研究の目的

最初に「五期会」会員が抱いた思想を明らかにするため、結成に至る背景や活動内容、解散理由などの研究を行い、同時に「五期会」の歴史上の位置付

けを行う。

またそれと同時期において、協同設計に代表される、集団で設計を行う方法を模索した動向を明らかにする。

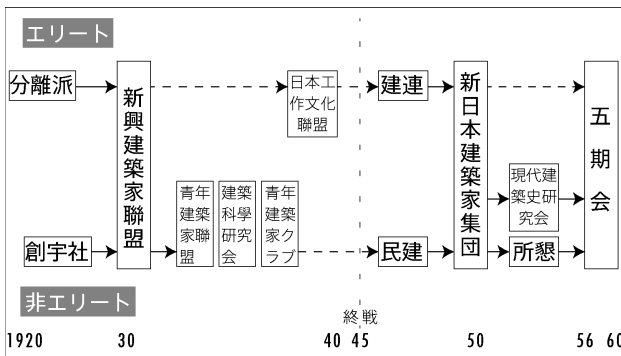
そしてそれらを元に、当時の設計組織のあり様を明らかにし、さらには現在の建築界の状況につながる可能性について考察する。

1-3. 既往研究

1950-70年代の設計組織についての研究は、太田(1961)⁴⁾、(1962)⁵⁾、(1969)⁶⁾の設計方法と設計組織についての論考や、村松貞次郎、浜口隆一『現代建築をつくる人々』⁷⁾のルポタージュなどで、建築生産の観点から考察されているものは散見されるが、通時的に研究を行ったものは少ない。

次に「五期会」に関する研究は、日本科学史学会編『日本科学技術史体系 第17巻 建築技術』⁸⁾、布野修司『戦後建築論ノート』⁹⁾、山本世紀監修『建築知識別冊 キーワード 50 第4号 職能としての建築家をみつめる用語』¹⁰⁾、宮内嘉久『少数派建築論』¹¹⁾などで、建築運動としての叙述はみられるが、設計組織の変遷と関連付けて研究されたものはみられない。

2. 戦前から五期会結成までの建築運動の系譜



「五期会」結成へとつながる、戦前からの建築運動の系譜は、(図1)に示される。各々の建築運動は、その構成メンバーの属性がいわゆる「エリート」か、「非エリート」という違いで、運動の性格やその目的が本質的に異なるという違いがあることがわかった。「エリート」とは、主に帝大卒などの高学歴保持者、または職務上の重要なポストに就いている人々を指す。彼らは建築界の表舞台に立ち、主導権を握ろうとする、理想主義的な思考を持つ。一方「非エリート」とは、生産階級・労働者階級にあり、表舞台ではなく裏方としての立ち回りが多い。思考は現実主義的であり、戦後は「民主化」の風潮のもと、

社会主義・共産主義的思想の色が濃くなる。

「五期会」は、「所懇」を中心としたこの両者の合流で結成されるが、両者の関係は建築運動の歴史上、相容れないことが多い。「五期会」においてもこの違いが、会員の考える設計組織内の設計者の将来像への相違に影響したことがみられた。

3. 戦後からの協同設計を模索する運動の系譜

「五期会」結成前の1954年に建築界で初めて、設計者が集団で設計を行う取り組み「協同設計」が、「総評会館」¹²⁾の設計でなされた。協同設計の目的は2つあり、一方は「人間関係の民主化」、つまり設計組織内の「チーフドラフトマン体制」を見直すことである。他方は「建築デザインの民主化」、つまり作品における個性・作家性と捉えられている、設計者の主観的なデザイン思考の客観化である。

しかしこの2点は、参加者が完全に区別して認識しておらず、協同設計の取り組みは多くの議論を呼んだ。その理由は参加者の属性にあるといえる。すなわち、ドラフトマン的立場の人間は前者を優先し、チーフ的立場、また今後チーフになる立場の人間は後者を意識して、両者の意見をまとめるのは困難であった。ここにも、「エリート」「非エリート」に起因する思想の違いがみられた。

またこれと並行して、技術者＝設計関係者と、労働者＝施工関係者との協同を図る「民建方式」の検討もされたが、議論が錯綜して実現はできなかった。

また1950年代後半には、建築作品への設計者の個性反映の有無を示す、「作家」「非作家」という言葉が疑われつつも建築界に登場し、議論¹³⁾がなされていた。その中で協同設計が起こった背景には、注目を浴びる作家的建築家に対する批判として、協同設計によって個人名を冠しない「非作家性」を獲得しようとした思想がみられた。すなわち、この取り組みが、以後の作家・非作家の議論を呼ぶ引き金となった可能性が考えられる。

4. 「五期会」の歴史上の位置付け

4-1. 「五期会」結成の要因

結成の要因は、以下の3点があげられる。

第一点は、職場環境の不满である。設計事務所や大学研究室で、徒弟制度のもと正当な評価を受けない下積み期間を経て独立の道を進む「建築家の育て方」¹⁴⁾に対する不满は、20-30歳代の共通認識であった。これを改善して効率良く建築家になろうとする者や、設計労働という概念を打ち出して、その労働自体を評価して、独立した建築家を目指さない設計者のあり方を求めた者達が、協同設計をきっかけに

「設計体制の変革」を掲げて団結をした。

第二点は、建築家の職能についての問題意識である。1950年交付の建築士法により、建築家の職能が規定されたことへの反発や、1953年開催の「国立国会図書館」コンペの要項に建築家の著作権を無視する内容があり、職能への問題意識が表面化した。それを機に30-40歳代の中堅作家と呼ばれる建築家らが「例の会」を結成するが、自らの立場上積極的に行動できず、エリート建築家のサロンのような集団となった。これに対する若年世代の危機意識や対抗意識、また同様の問題意識が「五期会」の結成を刺激した。

第三点は、会員のエリート意識である。「五期会」という名称には、日本の建築界を率いてきた世代が、「明治時代の辰野金吾の世代を第一期、佐野利器・内田祥三らを第二期、岸田日出刀・前川國男らを第三期、丹下健三・大江宏らを第四期として、自分たちは第五期の世代である」¹⁵⁾という強い自負がみられる。

以上より、従来の建築家像とその設計体制を乗り越え、自身の職能を問う意識は、エリート建築家を目指す者達の意識と矛盾していたことがわかる。

4-2. 「五期会」会員

会員は、民間の設計事務所に働く設計者および自立の体制をとる20-30歳代の若い世代の設計者が中心となる。さらに運動の趣旨に賛成する協力者として、同世代の歴史家、評論家、建築ジャーナリストなどが参加している。(会員であったことが判明している者を表1,2にまとめる。所属は1956年時点。)

普通会員			
[事務所ブロック] 設計事務所所属		[自立体制ブロック] 設計事務所主宰	
大高正人	ミド	菊竹清訓	菊竹清訓建築設計事務所
木村俊彦		横山不学	横山建築構造設計事務所
鬼頭梓		横山公男	松田平田設計、1957-連合設計社
河原一郎			
栗原忠	合作社	海老原一郎	海老原建築事務所
富安秀雄	市浦建築設計事務所		
林昌二	日建設計工務株式会社		
橋本邦夫	所属不明		
沖種夫			
谷寛之			

(表1)

普通会員		協力会員	
大学研究室所属		歴史家、評論家、批評家、編集者など	
大谷幸夫	丹下研究室	村松貞次郎	歴史家
磯崎新		稲垣栄三	歴史家
吉川健		川添登	評論家、新建築編集長
吉田秀雄	池辺研究室、建設工学研究会	平良敬一	ジャーナリスト、新建築編集者
みねぎしやすお		宮内嘉久	編集者
		田辺員人	国際建築編集者
		原田敏	編集者

(表2)

さらに普通会員は、設計事務所ですラリーマン建築家として働き、将来そこに骨を埋める覚悟で、所内の設計体制の改善を目ざす人々の「事務所ブロック」と、独立あるいは共同で設計事務所を開いていた人々の「自立体制ブロック」に明確に分けられていた。両者は互いに認め合いながらも、会の活動のウエイトの置き方を牽制し合い、活動の停滞の原因

になったとされている。¹⁶⁾

また、村松の手記によると、「事務所ブロック」の中でも、「富安的」とされる事務所に残る層と、「大高的」とされる自立体制ブロックに移ろうとする層が「建築家の image の描き方の差」¹⁷⁾により対立したとされ、設計者の将来像によって、目指した設計組織思想が大きく異なっていたことがわかった。

4-3. 「五期会」活動目的・内容

活動目的は、1956年6月17日結成時の宣言、「五期会宣言」¹⁸⁾に明文化されている。その内容は、これから世に出ようとする若手建築家・設計者が、自由な創造活動を展開できる環境をつくり、建築界のさらなる発展を目指すために、建築家の主体的・内的条件である設計体制や設計組織の変革を図るというものである。

しかし実際の活動は、その目的とは離れた『新建築』問題に集中した。これは1957年の『新建築』で村野藤吾を批判した記事が発端で、編集部員(川添登、平良敬一、宮内嘉久、宮嶋罔夫)全員が解雇された事件である。これを委員会が会議で重要問題として扱った結果、富安秀雄を筆頭とする会員から、会の方針を見失っていると指摘され、委員会と会員との対立が決定的になる。

このような体制を批判する内容の指摘は、「五期会」が発行した機関誌『設計・組織』内で多く扱われた。富安は「五期会不信任」¹⁹⁾という論考で、「事務所ブロック」所属の会員数の少なさを指摘した上、上記の『新建築』問題に触れ、会の取り組みを実践する会員と、それを先導していく委員会との溝が深くなり、会の団結力低下を指摘している。

他の活動は、1956年に建設が決まった「国立劇場」の大規模なコンペにおいて、「日本建築学会」、「JAA」、「日本建築士会」に呼びかけを行い、政府に対して公開コンペを要求したこと。他に、研究会、合宿の開催、世界デザイン会議への批判活動などが知られているが、いずれも成果は少ない。

総じて「五期会」の活動は、当初掲げた目的を果たす成果は得られなかったといえる。

4-4. 「五期会」規約凍結の要因

「五期会」は1960年4月12日に、規約を凍結する形で、活動を解消した。

一番の原因は、1955年に発足した建築家の職能団体「日本建築家協会(JAA)」と役割が重複し、建築家の職能改善への取り組みを行う場所がJAAに移ってしまい、その存在意義を失ったからであると推測される。当初はJAAに批判的姿勢をとった委員会も、

会員が JAA に所属していく状況になると存在を認め、「五期会は Free Discussion の審議機関で、実行委員会として JAA を考える」とする見解を示し、やがて「五期会」の存在意義を失ったと考えられる。

次の要因として、会員間の思想の相違があげられる。参加メンバーは「設計体制の改善」という共通意識を持っていたが、各自の設計者としての将来像により、取り組む内容、目指す方向に大きな差異が生じたことである。その将来像とは「自立体制ブロック」、「事務所ブロック」の違いに現れる、「スター建築家」になるか「サラリーマン建築家」になるかという違いである。

前者は、彼らは往々にして「エリート」であり、将来的に「作家」的な「スター建築家」を目指すため、表層的な作家主義に陥る先行世代への批判として、また「建築家の育ち方」といわれる、徒弟関係が強い現体制を打開し、建築家が自立しやすい環境を目指して活動を行った。

後者は、「エリート」が歩む旧来の路線とは異なる建築家の生き方を模索し、「個人」の集合により、個人を超えた「集団」の力の獲得と、設計活動の客観化の推進、労働環境の改善などを通して、組織の中の建築家という、「新たな建築家像」の確立への活動を行った。

これが時間の経過により、前者は既成建築家と同じ道をたどり、後者は、請負企業の設計者との連携を持ち始めるなどして、その違いは決定的になった。

またこの両者の議論でみえたのは、結果としての作品に対する作家性・作品性をどう捉えるかという論点である。前者はこれを重視するゆえ、集団で設計を行う組織にはビューロクラシーが発生し、それと建築家の作家性は両立できないとして、組織における個人の関係の限界を指摘した。一方後者は作品性より設計過程を重視し、設計体制や設計環境に焦点を当て、組織で設計を行う理論の確立に取り組んだ。

これらの思想の違いは、その後の設計組織のあり方に大きく影響したといえ、設計組織思想を考察する上で、非常に重要なポイントとなるであろう。

4-5. 「五期会」規約凍結後の動向から考察される、歴史上の位置付け

ほとんどの会員が「日本建築家協会」に入会し、「五期会」の初心を内包しながら活動を展開していった。そして設計体制変革への意識は、設計監理体制の改善として実行された。

所属していたジャーナリスト達はこの時期以後に、戦後建築史の叙述を多くまとめた。この事実から考

察すると、「五期会」は、戦後からの建築史において、あるターニングポイントになった可能性が推測できる。その要因は2点推測され、ひとつは、時間軸上、歴史の様相が大きく変わる高度成長に入る直前の位置に、運動が起こったことである。他方は、「五期会」が当時の建築家・設計者において、自らの職能について目を向けたきっかけとなり、その後の建築生産体制や、思想、活動に何らかの影響を与えたのではないかという点である。

また結果として「五期会」は、活動自体の成果は少なく、以後の設計組織に直接影響した事実はみられなかった。しかし本研究を通して考察すると、これは建築運動・批判活動・世代間の団結、などという既往の認識よりも、設計組織のあり方を模索した取り組みであったと歴史上位置づけられる。

5. 協同設計に取り組んだ設計集団・設計組織

ここでは 1950-70 年代に協同設計に取り組んだ設計組織の言説を対象とし、前項までの考察で明らかになった組織思想の要点をふまえて、その思想を明らかにした。

□ RAS 建築研究所

・活動期間：1961年 — 1968年（解散）

・主要メンバー：原広司、香山寿夫、上杉啓、塩野谷健二郎、又吉清春、宮武恒男、慎貞吉、宮内康、三井所清典、伊藤允規、西牟田端徳、川上岩男、落合弘子、北川若菜、神山保弘、小川朝明

・概要：RAS は体制の整った組織設計事務所のように、従来の方針で進む団体でもなく、一人のアトリエでもない体制で活動を行った。またメンバー内での、設計における個人と組織の関係性の認識には相違があり、様々な理解があった。ただ共通しているのは、「個」を強くして、ゆくゆくは巨匠的な建築家像に近づくことを求める、旧態依然とした建築家の将来像であった。そのために、組織としての永続性や経済活動は犠牲にして、実験的な組織形式に取り組んだ団体といえる。²⁰⁾

□ UHON グループ

・活動期間：1951年 — （不明）

・主要メンバー：内田祥哉、橋爪慶一郎、大場則夫、西野範夫、簡野義隆

・概要：設計過程の客観性の獲得のため、協同設計に取り組む。またその際の設計プロセスの重要性も指摘している。また設計における個性の問題として2つの意味があるとする。一方は「協同設計の結果出来た建築に個性があるか」という問題、他方は「メンバー（原文ママ）の個性が協同設計の過程の中でどういうことになるか」という問題である。

前者については、設計の密度が上がるほど「グループとしての個性」がシャープになるとし、個性がないのは設計の密度に起因する問題であるとしている。後者については、「グループとして個人をその中にいかに活かすかということがグループの能力を決定する鍵」であるとしている。ここで、「グループの個性」について言及している点は、以前の設計組織にはない特徴である。²¹⁾

□ 日建設計工務株式会社（現・株式会社日建設計）
・活動期間：（1950年） — 現在（活動期間の始まりは、日建設計工務株式会社として発足した1950年と便宜上表記している。1900年発足の住友本店臨時建築部を起源とする。）

・主要メンバー：林昌二（「五期会」所属）
・概要：分業にとわられない自由度の高い集団のあり方を目指し、全員が対等な関係の共同設計方式ではなく、中心となるチーフ設計者を設定し、個人の存在をある程度確立するという、組織と個人の関係の均衡を図る取り組みを行う。また永続的な活動をする組織としての安定性、経済性の観点から、流行的でない合理的な非作家的デザインを目指し、作家性を否定する。²²⁾

これらの分析の結果、この時期の設計組織は全て、協同設計によるビューロクラシー化のデメリットを克服している点。そして設計組織において、所属する個人の作家性ともいえる「個性」を設計に反映させる程度によって、その性格が従来の設計組織とは大きく異なってくる点が明らかになった。

6. 結論

以上の研究を通して、1950年代からの設計組織思想をみる際のパラメータとして、以下の要素の存在が明らかになった。

- ・ 個 private — 組織（集団） organization
- ・ 作家 character — 非作家 anonymous
- ・ （組織の）永続性 permanent — 一過性 temporary
- ・ （設計者の関係）対等 equal — 優劣 superiority, inferiority

次にこれらを考慮した上で、1950-70年代の設計組織を大別すると、以下の3種類の設計組織思想がみられた。（以下、次頁の図2に示している。）

① 戦前から存在する、主宰する設計者個人の作家性を強く反映する設計組織

これは現在、「アトリエ系」と称されている設計組織であり、その体制は戦前から変化していない。主宰する設計者個人の主観のもとに判断がなされ、強い作家性を有する。主宰する設計者は絶対的な存在であり、その他の所員は従属的な関係のもと、自身

が独立して「スター建築家」となる日を夢見て働く。

② 戦前から存在する、組織化された集団の設計により、設計者の個性を反映しない設計組織

これは現在、「組織系」と称されている設計組織である。個人の能力を超えた組織の優位性を獲得するため、設計者は、組織の一員として働き、全員が対等な関係ではなく階層化と分業化がなされる。時に、その組織化の弊害が批判の対象となる。客観的な価値判断のもと、非作家性を有する。組織としての永続性、経済性を追求し、合理化がなされる。

③ 協同設計の取り組みと同時代又はそれ以降（1950年代初頭）に発生した、ビューロクラシーを乗り越えた体制で組織化された集団による設計により、設計者の個性の反映を模索する設計組織

この集団は、戦後直後に流行したビューロクラシーの概念を否定する点で、以前とは異なる設計組織思想をもつ。この戦後のシステムの乗り越えによって、個々の優れた能力が活かされず、平均的、妥協的なものになる組織の弱点を克服しようとするものである。

またこれは以下に指摘するファクターで、さらにA-Cに分類することができる。

③-A. 集団の中で、個々の「個人」の個性を反映しようとする設計組織

・自立した「個」の集まりとしての設計組織であって、設計組織化は目指さない。

・メンバーは、旧来からある「スター建築家」像を目指して、新たなる表現手法として協同設計を取り入れている。

・そのため、将来独立を目指す者の実験的な取り組みであって、組織としての永続性、経済活動能力は重視しない。

③-B. 集団としての「グループ」の個性を反映しようとする設計組織

・設計手法の客観化を第一に目指し、主観が強い作家的な表現の建築を批判する。

・作品の評価よりも設計プロセスを重視する。

・協同設計は客観的な判断を行う手段であって、目的ではない。

・個々の個性を否定するのではなく、それを活かして「グループの個性」を獲得する。

③-C. 集団の中の個人の個性をある程度反映させる設計組織

・個人の能力を超えうる集団としての力を求める。

・作家性を否定する。それゆえ、非作家性・アノニマス性を獲得する。

・大人数の組織として営利活動を行っているため、永続性、経済活動能力を第一に優先する。

・しかし、設計者責任の観点と、また優れた設計者の「作家性」とも称される個人の能力を組織に活かすために、個人の存在を全く無くすのではなく、個人一組織の関係の均衡を計ることが必要とされる。

これらの性格を大きく分けるファクターの一つ目として、設計者の将来像が、「従来のスター的建築家像」になることを求めるか、「従来にはない新しい建築家像」を模索するかという点があげられる。そして、「従来にはない新しい建築家像」を求めるきっかけとなったのが、「五期会」の問題意識であるといえる。

そして二つ目のファクターとして、設計者の「個性」に対する思想の違いがあげられる。「個性」を反映するためには、一般に「組織」における「個人」の役割が占める割合を高める必要がある。そのバランスによって、設計組織自体の方向性や、体制が大きく変わることが判明した。また B. にあげられる、「グループ」としての「個性」を意識し始めたことも、この時期からの特徴である。

また考察として、上記③-B の設計組織の系譜の発端にあたるのは、1954 年の「総評会館」の協同設計であるといえる。その時の組織は、「総評会館設計会議」という「会議」という名称で存在し、以後、「設計組織」、「設計同人」、「グループ」、「チーム」などと名付ける設計組織が現れるが、その性格は似たものであるといえる。

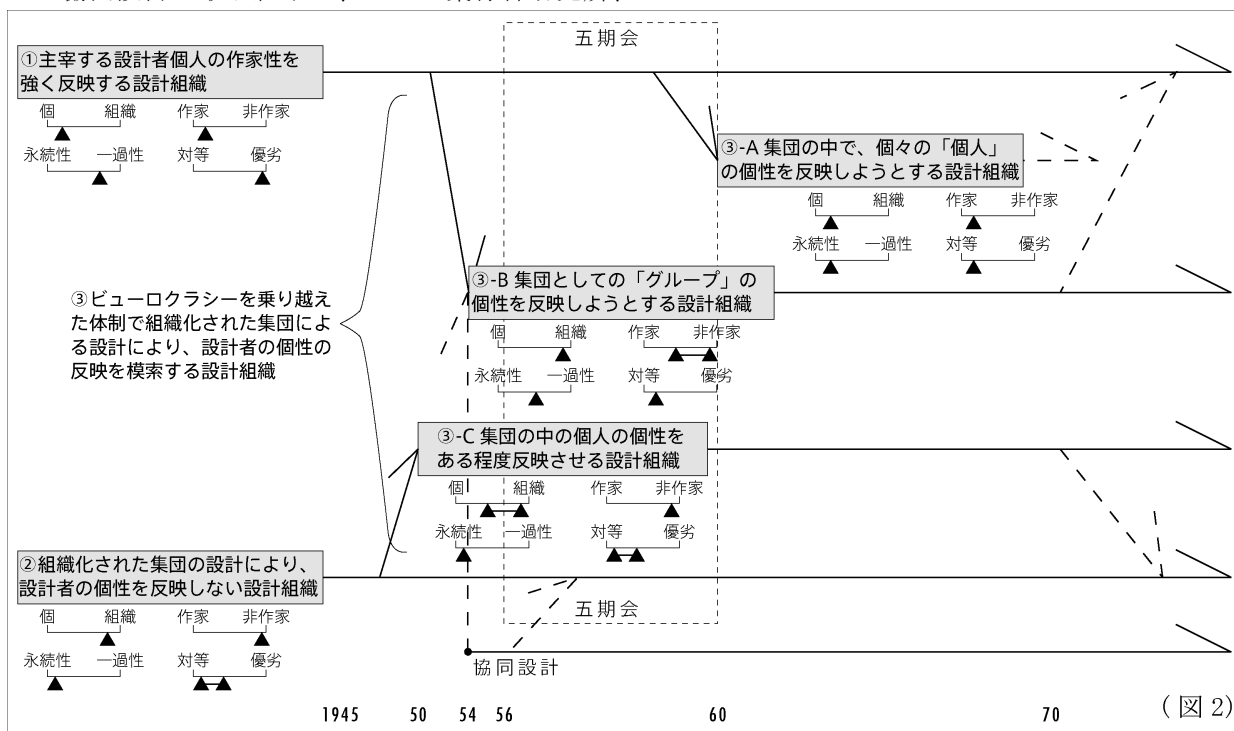
これについて日埜直彦が、2013 年に『建築雑誌』で述べた指摘²³⁾は興味深い。それは、飯島洋一が2001 年の『住宅特集』で述べた「ユニット派批判」に応答した林昌二の指摘について述べたものであり、この協同設計の取り組みが、RIA 建築総合研究所、

林・山田・中原設計同人、RAS 建築研究所、象設計集団のような 70 年代の共同作業につながり、ゆくゆくは現代につながる系譜であるとしている。

この指摘には筆者もおおむね賛成であるが、現代へと続くと考えられるのは、③-B のグループとしての個性の獲得への取り組みと、③-C の集団の中の一部の個人の個性の反映だけであって、③-A の個々の個人の個性を反映した集団の存在はみられない。よって、この自体の取り組みは、全てが現在へと繋がってはいないことが推測される。この差異を明確に把握することが、以後の研究において必要であろう。

註

- 1) 太田利彦 (1969) 「建築生産方式の変化と設計行為、設計者のプロフェッションの変化」『建築雑誌』84(1010), p.301.
- 2) 太田利彦、前掲1、p.302.
- 3) 宮内嘉久 (1974) 『少数派建築論』井上書院。
- 4) 太田利彦 (1961) 「設計方法と設計組織について」(課題・36 年度大会研究協議会)『建築雑誌』76 号,(903), p.513-515.
- 5) 太田利彦 (1962) 「設計方法と設計組織に関する研究 I 設計方法と設計組織について」『清水建設研究所報』第1号,99-102p.
- 6) 太田利彦、前掲1、p.299-303.
- 7) 浜口隆一、村松貞次郎 (1963) 『現代建築をつくる人々《設計組織ルポ》』KK 世界書院。
- 8) 日本科学史学会編 (1964) 「第12章 復興」『日本科学技術史大系 第17巻 建築技術』第一法規出版。
- 9) 布野修司 (1981) 『戦後建築論ノート』相模書房。
- 10) 山本正紀 監修 (1983) 『建築知識別冊 キーワード 50 第4号 職能としての建築家をつめる用語』建知出版。
- 11) 宮内嘉久 (1974) 『少数派建築論 - 編集者の証言』井上書院。
- 12) 「総評 (日本労働組合総評議会)」の本部会館として建設された。
- 13) 『建築文化』1957 年7月号において、「作家という立場からの発言: 作家の側からみた建築家と建築の諸問題について」、「非作家という立場からの発言: 作家と非作家とにからまる建築の問題点」などといったテーマで議論が交わされた。
- 14) 日本科学史学会 編、前掲8、574p.
- 15) 本多昭一 (2003) 『近代日本建築運動史』ドメス出版、144p.
- 16) 日本科学史学会 編、前掲8、582p より抜粋。
- 17) 日本科学史学会 編、前掲8、584p.
- 18) 新建築 (1956) 「しんけんちく・にゅーす 五期会、新たな活動段階にはいる」『新建築』7月号。
- 19) 日本科学史学会 編、前掲8、587-588p.
- 20) 服部岑生 (1968) 「特集: 原広司とRAS」『建築』5月号 青銅社。
- 21) UHON グループ (1956) 「協同の方法について」『新建築』5月号, 11-12p.
- 22) 林昌二 (2004) 『建築家 林昌二 毒本』新建築社。
- 23) 日埜直彦 (2013) 「多数なる「建築家」について」『建築雑誌』vol.128, No.1651, 26-29p.



(図2)

討議

討議 [横山教授]

「五期会」があった故に、こう（結論で示した内容）になったという理由は、どのように説明できるのか。

回答

あくまで「五期会」が、以後の設計組織のあり方が変化した時期にあったという事実だけで、直接的に「五期会」が影響したという事実はみられない。

討議 [吉田准教授]

結論の図においては、「五期会」の発生以降に変化が起こったことを表現していたのではないのか。

回答

この図は、「五期会」の活動時期と同時期的に、設計組織の変化が起こったことを示しているだけで、直接の影響までは述べていない。

討議 [横山教授]

では「五期会」の存在意義とは何なのか。

回答

「五期会」の存在意義とは、当時（1950-70年代）の設計組織の思想を研究する際、これに目を向けることで、その片鱗を窺い知る手がかりとなりえるという点である。

討議 [横山教授]

その程度で存在意義といえるかは疑問である。

また、例えば富安秀雄のように、まだご存命である「五期会」メンバーが存在するが、ヒアリングは行ったのか。

回答

ヒアリングは行っていない。

討議 [横山教授]

文献調査で分かることは限界があると思われる。当時の文献とヒアリング調査の内容を加味し、「五期会」の活動内容を明らかにするといった研究を行わないと、研究として不十分ではないのか。

回答

当時の言説を中心に研究することで、現在の解釈や理解では見られなかった、当時の人々の機微を讀

み取ることに注力したためである。

討議 [横山教授]

歴史研究のスタンスとして疑問が残る。ご存命である研究対象者へのヒアリングは、その資料自体に価値があるものといえ、積極的に行うべきである。

討議 [倉方准教授]

横山教授がおっしゃった通りで、注目されていないから研究を行ったという、その枠組みがどうかという問題である。ヒアリングだけが全てではないが、論理的に結論に結びつく道筋がみえてこない。例えば富安秀雄は知っているので、ヒアリングと併せて検討を進める手順があっても良かったのではないかと思う。

討議 [吉田准教授]

図2において、▲印が連なる部分があるが、これはある程度幅を持っていることを示しているのか。また、最終的にはこれらの分類（③-A,B,C）が以降の時代で変遷していたことを示しているが、実際に1960年代以降のグループをいくつか調べたのか。

回答

▲印については、仰る通りです。

③-Aは、1960年代の「RAS設計集団」以降はみられなかった。③-Bは、1950年代の「UHONグループ」などにみられ、以降の1990年代の「ユニット派」に繋がる素質があることが判明した。それは「五期会」会員の林昌二自身も指摘している。③-Cは、1950年代からの「日建設計工務株式会社」などから、現在における「組織設計」と呼ばれる組織設計事務所にみられる。